研究所日記

巣箱の掃除をしてみたら…

巣箱の中のヒメネズミ

平成 20 年度から地球温暖化の自然環境への影響についてモニタリング調査を始めています。その一環として、当所飯綱庁舎敷地の森林内に巣箱を設置し、ヒガラという鳥の産卵日をモニタリングすることを始めました。これは、近年の温暖化傾向に伴って一部の鳥類では産卵日が早まっているという報告があり、当所でも同じような傾向を確認できるかどうかやってみようということで始めた調査です。昨年度は、設置した 30 個の巣箱のうち、ヒガラ（7 個）、シジュウカラ（5 個）、不明（5 個）の営巣が確認できました。また、ヒガラの平均初卵産卵日は 4 月 28 日、シジュウカラは 5 月 4 日でした。

さて、平成 21 年度も同じ調査を始めるため、まずは巣箱の掃除をすることにしました。ヒガラの産卵が始まる前の 4 月上旬に、何人かの研究員と一緒に巣箱巡りを行いました。いくつかの巣箱を掃除した後、次の巣箱のふたをめくってみると、なにやら巣箱の中でサクサクと動いているではありませんか。と思った途端、巣箱からものすごい速さでヒメネズミが 1 匹、もう 1 匹と飛びだしていきました。どうやら産卵に使われなかった巣箱はヒメネズミのおうちとして使われていたようです。一瞬でしたが、思わず微笑んでしまう春の森の出来事でした。

（浜田　崇　kanken-junkan@pref.nagano.jp）

研究ボランティアの協力を得ながら植物標本を作成しています

植物標本作成　作業風景

飯綱庁舎には国際登録された植物標本室があります。植物分類担当の私の使命はこの標本室を多くの一般県民に活用される状態にすることです。当研究所の公開講座が開かれるたびに参加者に標本室の利用をお勧めしてきました。その効果もありこの 2 年間で標本作成等に御協力いただいたボランティアの延べ人数は約 500 名を越えました（見学者を除く）。毎日のように来室し作業を手伝っていただいているお陰でこの期間で約 1 万 2,000 枚もの標本を収蔵することができました。また、未同定のままだった標本の整理も進み、昨年の 5 月に押し葉標本は 15 万点を超えました。現在は 16 万点に向かって、みなとともに張り切っています。標本整理は大変な作業です。①植物の採集、②種の同定、③乾燥、④ラベリング、⑤標本作成、⑥防虫処理、⑦収蔵までの全過程を終了するまでに最低でも 1 年を要します。例えば③乾燥では約 1 ヶ月は標本を挟む新聞紙を毎日交換します。同じ植物を数十回も見るのでその種の形態や名前が覚えられるのです。植物学の基礎は標本作りと言われますが、標本室に来ればその意味を実感できます。みなさんには標本業務だけでなく、自然ふれあい講座や自然生態園でのフェノロジー（植物季節）調査にもご協力いただいています。感謝です。更に多くの方のご参加をお待ちしています。

（永井茂富　kanken-shizen@pref.nagano.jp）

学会いろいろ

研究所と関わりのある学会を紹介します！

環境保全・公害防止研究発表会

環境保全・公害防止研究発表会は、通常の学会とは異なり、環境省、全国環境研協議会及び該当年度の開催県が共催で開催しています。地方公共団体の環境研究機関の研究者等が成果を発表し、国と地方公共団体、あるいは地方公共団体相互の連携を図ることを目的として、昭和 49 年から毎年開催されています。

昨年は、11 月 18 ～ 19 日に広島県の共催で、「第 35 回環境保全・公害防止研究発表会」が広島市の広島県健康福祉センターで開催されました。全国環境研協議会の会員から 33 題の発表がありました。発表は環境一般（4 題）、大気（4 題）、水質（4 題）、生物（4 題）、廃棄物（4 題）、化学物質（13 題）のセッションに分かれて行われました。1 日目は主催者あいさつと特別講演に続いて研究発表が行われ、2 日目は 2 会場に分かれて研究発表が行われました。2 日間で会員と行政機関等から延べ 263 名の参加がありました。

当所からは「諏訪湖流入河川汚濁負荷実態調査研究」という題で、諏訪湖水質保全計画を策定するにあたり上川・宮川流域の実態調査を行った結果について発表しました。

（吉田富美雄　kanken-mizu@pref.nagano.jp）

諏訪湖（平成 20 年 5 月）

日本ウイルス学会
http://jsv.umin.jp/

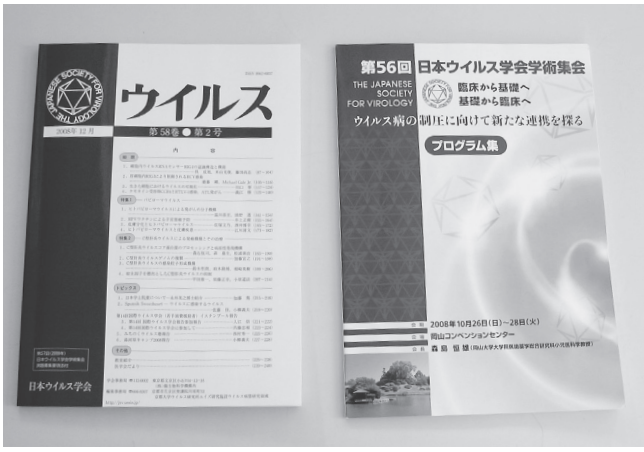
日本ウイルス学会は、1953 年（昭和 28 年）5 月に設立されて以降、毎年、場所を変えながら学術集会が開催されています。

2008 年度の学術集会は、10 月 26 日（日）～ 28 日（火）に岡山市の岡山コンベンションセンターにおいて、「臨床から基礎へ　基礎から臨床へ（ウイルス病の制圧に向けて新たな連携を探る）」をテーマとして行われました。この学術集会では、口頭発表（266 題）をはじめ、ポスターセッション（280 題）のほか、教育講演などが催され、会場はどこも熱気に溢れていました。また、「鳥インフルエンザから新型インフルエンザへ」といった非常に関心の高いテーマによるシンポジウムも行われ、そこでは最新の知見が数多く紹介されていました。

筆者は、食中毒等の集団下痢症を起こすウイルスに関するセクションにおいて、「長野県で発生したサポウイルスによる集団感染性胃腸炎の 2 事例」という演題名で発表を行い、多くの収穫と刺激を得ることができました。

今後も、この学術集会に参加し、多くの研究者の方々とのネットワークを作り、様々な情報を得たいと考えています。

（吉田徹也　kanken-kansen@pref.nagano.jp）



学会誌、学術集会プログラム集